

教 仏 庵 草

第193号
(発行日)
2006年7月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mailadress--bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《聞法会ご案内》
○〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
○〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○真宗共学会――毎月第一と
第三木曜日午後7時より。
*8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

真宗問答(二十四) 第十八願その二

D 「法然聖人は、無量寿經に説かれてゐる阿彌陀仏の四十八願の中で、第十八願こそ、阿彌陀仏が一切衆生の平等往生を誓われた願であると了解され、第十八願を念仏往生の願と名づけられたとのお話しを前回いたしました。考えてみれば、阿彌陀如来様は生きとし生けるものの苦しみを除き、迷いを離れしめて仏陀にならしめたという広大な願いを起こされたということ、このことは驚くべきことだと思います」

Y 「私たち一切衆生を救おうと立ち上がってくださいましたのが阿彌陀仏であり、その仏様を毎日拝ましていただいてゐるのに、そのことを真剣に受け取っていませんね」
D 「そうですね。仏法のお話しを聞いても、自分にとって極めて大事なことなのだというような聞き方をしていません。聞いてはいるけど、身を入れて聞いてはいないのです。要するに信じて聞いていないのです。無量寿經の中で釈尊が
教語開示すれども信用する者は
少なし

と仰せられますが、昔も今もその点は変わらないうすね。釈尊の言葉に対してやっぱり信用していませんね。逆に、仏法が信じられてくるということ、は、仏様のお話しが我が身に「私の言葉はまこと」と受けとられてくることです」
Y 「仏様の言葉を信じないで、私たちは自分の考えを信じているのでしようね」
D 「ええ、おおむね人は自分の考えを確かなものとして信じ、自分の考えに合わないものは信用せず、受け入れられないものです」
Y 「自分の考えを握り、自分の考えに合わない話は捨てている。こういう態度で聞法しているから、仏の言葉はいつまでもカヤの外ですね」
D 「そうですね。けれども、いろいろ悲しい目や辛い目にあつたりして、自分の考えが破綻してくると、自分の考えがアテにならなくなり、仏の言葉に真剣に耳を傾けるようになるのですね。さて第十八願の事ですが、無量寿經に
たとひわれ仏を得たらんに、
十方の衆生、至心信樂して、わ
が国に生ぜんと欲ひて、乃至十

念せん、もし生ぜずは、正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く
でありませぬ。この中で
乃至十念せん、もし生ぜずは、
正覚を取らじ
の文言に、一切衆生を浄土に往生せしめんとす阿彌陀仏の誓いが表されてゐると法然聖人は指摘されるのです」
*
Y 「乃至十念せん、もし生ぜずは、正覚を取らじ
(たつた十声なりとも念仏申すものを浄土に生まれさせられぬいふなら私も仏にはならない)のお言葉に、すべてのものを救おうという法蔵菩薩(アミダ仏)の大悲のお心が表されてゐるのですね」
D 「ええそうです。
乃至十念せん、もし生ぜずは、
正覚を取らじ
というのは「称えるばかりで助けろ」という阿彌陀仏の誓い、いわば「我が名を称えよ、必ず救う」という思召しです。この念仏の誓いに万人を平等に救うという阿彌陀仏の大悲の心が表されてゐるのです」
Y 「どうしてですか」
D 「阿彌陀仏が「称えるばかりで助ける」と仰せられるのは、称名念仏はだれでも、どこでも、いつでもできる行ですから、「我が名を称えるばかりで救う」という救済には一切の衆生を救おうという阿彌陀仏の願心があふれるばかりに表されてゐます。もし衆生に対する救いに条件をつけ、戒律をたもつものを救うというような阿彌陀仏のお誓いなら、戒律をたもてない人は救いからまれてしまいます。もし坐禅修行を続けるものを救うというお助けなら、坐禅修行のできないものはお助けには除かれます。もし經典をよく理解するものを救おうという本願でしたら、難しい經典を読んでも理解できない愚かな者は捨てられてしまいます」
Y 「こういう仏道修行ができるような人は少ないですから、そういうものを救うという仏のお助けなら私たち修行のできないものはお救いから落ちこぼれませんね」
D 「ええそうです。また道徳的に人に深い愛情をそぐ人を救うというお誓いなら、人への愛情の乏しい人は救われません。また施しをよくする人を救うという本願なら、ものおしみをす

《盂蘭盆会法要》
8月10日(木)
午後2時始まり

るものは除かれます。また辛抱心の強い人を救うといわれるなら、忍耐心の乏しい人は駄目です

Y 「もし清らかで善良な心をもっているものを救うという様な本願なら私は落ちこぼれてしま

D 「また、懺悔や感謝ができる

ものを救うといわれるなら、感謝や懺悔心の乏しいものは救われませんか。このように私たちが

の行いや心のありさまに対して、阿弥陀仏が注文を付け、こうな

ってこい、ああなってこい、こ

ういうものを救う、ああいうものは救えない、といわれるのなら、一切の衆生が救われることは不可能です。条件付きの救いなら特別にすぐれた人だけの救いになって、一切衆生の救いにはなりません」

Y 「そうすると（乃至十念せん、もし生ぜずは、正覚を取らじ）」というお言葉は、人それぞれの

あるがままなりで助けようとの誓いを表されたわけですね」

D 「そうなのです。そのことを浄土教の歴史の中で最初に深く了解されたのは善導大師です」

ご自身の上に確認することができたのです。その善導大師は、**乃至十念せん、もし生ぜずは、正覚を取らじ** というご文に、一切衆生を念仏一つで救おうという念仏往生の道を読みとられて、それを第十八願の中心に据え、十八願の心を次のように表現されました。

『無量寿経』に云うがごとし、

「もし我成仏せんに、十方の衆生我が名号を称せん、下十声に至るまで、もし生まれずは正覚を取らじ」と。

かのお心は、法蔵菩薩が十方の衆生に対して、（わすか十声なりとも念仏申すものを必ず浄土に生まれさせよう、もしそれで衆生が浄土に生まれることが出来

ない）と誓われ、この誓願はすでに成就して法蔵菩薩は阿弥陀仏になっておられる、だからこの誓いのとおりに衆生は念仏一つで救われるのだと信じなさい、

という思召しです」

Y 「この善導大師の十八願の理解によって法然聖人は念仏往生の道に入られたのですね」

D 「そうなんです。この第十八願の解釈に驚嘆し、ここに一切衆生の平等往生の道を見出されたのが法然聖人であり、その門下に身を投じられたのが親鸞聖

人でした」

Y 「乃至十念せん、もし生ぜずは、正覚を取らじ」というお心はそれほど深いのですね」

D 「ええ。このお心をもう少し考えてみますと、（我が名を称えるばかりで救う）とまで阿弥陀仏が誓われねばならなかった背景にあるのは、（人間には真実はない）と徹見したもう仏の大悲の智慧です。そのような人間理

解から、阿弥陀仏は真実ならざら我々をどう救うかを五劫に思索されたのでありましょう」

Y 「なぜ阿弥陀仏は私たちを念仏で救おうとされたのかといえ

ば、人間の精神とか人間性には純粋な真実がないということを知り抜かれたからですね」

D 「ええ、その上で、真実ならざる私たちを引き受けて、私たちに真実のもの（仏）にしようと願い立たれた。そこに広大な

真実のお働きがあるのでしよう。そういう意味で、真実ならざるものを真実にする、それが本当の真実、大悲の真実なのであり

まししょう」

する。そうすると今まで親切にしていたが、あんな人とは思わなかったと相手にたいする優しい心も薄れたり、逆に憎むような心さえ起こってくる。あるいは親切と云うことでいいですと、人にちよつと親切をすると、その人に（してあげた）という恩を着せるような心が起こる。そうするとその親切は純粋な無償の行為ではなくなって、（私が、オレが）という自我で汚れてしまします。このように清らかな親切というのは長続きがしないし、相手の出方で親切心も薄らぐ、というようになる。

これは人間の心が変わらぬ真実の心がながいがためです。真実心がなければ真実なるもの、いわば仏になることはおぼつかないこと

です」

Y 「人間の善い心はなかなか続かずころころ変わるし、善心がちよつと起ると・慢にもなりますね。ほんとうに、危ない、アテにならない心ですね」

D 「だからといって、こういう人間的な純粋でない親切な行為が無駄というのではありません。この世の中では、そういう不純でたよらない親切しかなかな出来ないと知って、謝りながら親切を為していくことは大切なことです。少し話がそれましたが、そういうわけで人間の不純な心での行いを積み上げて、でも仏にはなれない。汚れた窓ガラスを汚れたぞうきんで拭く

ようなもので、我が心で我が心を純化しようとしてもとてもできない。そういうことを見越し、私たちの（自分の心をどうすることも出来ない）苦しみを知り抜いて、阿弥陀様はそんな私たちを全面的に引き受けて救おうとされるのです」

Y 「（我が名を称えよ）」というのは、どうしてみようもない人間の、その苦悩をよくよくご存じで、私たちに先だつて知り抜き、そんな私たちに喚びかけたもう

仏の御言葉なのですね」

D 「ええそうですね。ですから（我が名を称えよ、まるまる助ける）と喚びかけたもう御言葉には、衆生の苦しみに共感し、

どこまでも見捨てたまわざる阿弥陀様のやるせない大悲のお心が非常によく表されています」

Y 「自分自身を自分で善き自己に変えることのできないという人間の根源的な苦しみがすでに阿弥陀仏によって大悲されていて、そんな私たちを（撰取して捨てない）という大いなる救いの言葉が

乃至十念せん、もし生ぜずは、正覚を取らじに表されているのですね」

D 「そうなのです。そうした底なしの大悲を聖人はこの誓願は、すなわち易往易行のみちをあらわし、大慈大悲のきわまりなきことをしめしたまうなり」とまで讃仰されています」（了）

歎異抄 第一章第一講

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。

弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとすしるべし。そのゆえは、罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々。
(歎異抄第一章)

現代語訳

(阿弥陀仏の誓願の不可思議なはたらきにお救いいただいて、必ず浄土に往生するのであると信じて、念仏を称えようという思いがおこるとき、ただちに阿弥陀仏は、その光明の中に撰め取って決して捨てないという利益をお与えくださるのです。

阿弥陀仏の本願は老いも若きも善人も悪人も分けへだてなさいません。ただ、その本願を聞きひらく信心がかなめであると心得なければなりません。なぜなら、深く重い罪を持ち、激しい煩惱をかかえて生きるものを救おうとしておこされた願いだからです。

ですから、本願を信じるものには、往生には念仏以外のどんな善もいりません。念仏よりすぐれた善はないからです。また、どんな悪も恐れることはありません。阿弥陀仏の本願をさまたげるほどの悪はないからです。

今回から歎異抄第一章に入ります。この章は歎異抄の全体を総括したような文章で、みじんもゆるみのないタッチで真宗の教えの要が表現されています。それゆえ、簡単に読んですぐわかるというわけにはなかなかいきません。

この章は、
一。「弥陀の誓願不思議くあずけしめたもうなり」
二。「弥陀の本願にはく願にまします」
三。「しかればく云々」
の三段に分けることができます。

さて、第一段は真宗の教えの核心を表されたもので、聖人が

弥陀の本願信ずべし

本願信ずるひとはみな

撰取不捨の利益にて

無上覚をばさとするなり

とうたわれた『夢告和讃』と好一對であります。これらは、弥陀の本願が私たちの人生に臨み、私たちの人生が一瞬一瞬、弥陀の本願のもとで営まれ、弥陀の本願に信順するところに、撰取不捨の利益すなわち人生の根本的な救いがあることをつけ知らせているのです。

ですから弥陀の本願を無視したり本願を否定して生きるか、それとも弥陀の本願に信順して生きるか、そこに人生の根本的な幸不幸の分かれ目があるというところ、それが「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」から始まる言葉にはうかがわれます。

弥陀の本願というのは単なる一宗派に属する内容ではありません。万人にかけられている真実そのものの働きを言葉で表現したものです。ですからこの真実の表現の仕方によって、他の宗教での表現

ともなり得ましよう(その場合、表現の精度に違いが出てきますが)。

この第一章とか夢告和讃から流れてくる力は、真実そのものが永遠に私たちに喚びかけ、叫んでいる、そういう響きがあります。

私たちに弥陀の本願まします。私が生まれる前からまします。そして私は弥陀の本願をかけられての存在としてこの世に生まれてきた。ですから、この本願にそって生きるかどうかいつも問われているのです。

ちようど、私が生まれると、生まれる前から私のいのちを生かそうとする空気があり、太陽があり、食べ物があり水があり、私を慈愛してくださった両親がいて、私が生きられるようにちゃんと用意されている。そういう生きられるように用意された世界に生まれた。

そのように私の救いがすでに用意されている世界に私たちは生まれてきたのです。今すでに十劫をへたまえる弥陀の本願がまします、そういう中に生まれてきている私たちであります。それゆえ「弥陀の本願信ずべし」と釈迦・諸仏や聖人がお勧め下さるのです。

弥陀の本願が私どもの上ですでに働いてくださっているから、この世の人生に起こるたくさんの方々の不条理の中を生きていくことができるのでありましょう。

実際、凡夫の目で見ると、あまりにもこの世は不公平や不平等や不条理に充ちているではありませんか。生まれつき身体の弱い病弱な人もあれば頑強に生まれる人あり、知能の高い人もあれば低い人あり、姿形の美しい人もあればそうでない人もあり、経済的に裕福な家に生まれる人もあれば食うにはなだ困る家に生まれる人もある。戦争の絶え間がない国に生きざるをえない人もあれば平和な土地で生活できる人もある。子供が健康で育つ人もあれば、幼くして亡くす人もある。生涯大きな事故に一度もあわずにいる人もあれば、不慮の事故にあつて寝たきりになる人もある。突然難病にかかって一生重い病気を背負って生きなければならぬ人もあるし、ほとんど病気がらしい病気をせずに生きる人もある。どうしてそうなったのか、多くの場合、理由や理屈の付けようがありません。凡夫の思いとしては、あまりにも人生は不公平であり不条理であるとしか思えませんが。しかも最後は、へまじめに生きてきた私がどうして死んでいかねばならないの(と思っても、その思いぐるみ死んでいかねばなりません。

でない人もあり、経済的に裕福な家に生まれる人もあれば食うにはなだ困る家に生まれる人もある。戦争の絶え間がない国に生きざるをえない人もあれば平和な土地で生活できる人もある。子供が健康で育つ人もあれば、幼くして亡くす人もある。生涯大きな事故に一度もあわずにいる人もあれば、不慮の事故にあつて寝たきりになる人もある。突然難病にかかって一生重い病気を背負って生きなければならぬ人もあるし、ほとんど病気がらしい病気をせずに生きる人もある。どうしてそうなったのか、多くの場合、理由や理屈の付けようがありません。凡夫の思いとしては、あまりにも人生は不公平であり不条理であるとしか思えませんが。しかも最後は、へまじめに生きてきた私がどうして死んでいかねばならないの(と思っても、その思いぐるみ死んでいかねばなりません。

しかし、こういう人生にただ一つのことがあり、それが弥陀の本願であります。この本願を受け入れるとき、さまざまの不条理のしこりが不思議にもほどけてくるのです。弥陀の本願は仏の慈悲の智慧であり、この大悲の智慧に包まれてはじめて、そういうやりきれなさが弥陀の慈悲の中に溶かされていくのです。

しかし、こういう人生にただ一つのことがあり、それが弥陀の本願であります。この本願を受け入れるとき、さまざまの不条理のしこりが不思議にもほどけてくるのです。弥陀の本願は仏の慈悲の智慧であり、この大悲の智慧に包まれてはじめて、そういうやりきれなさが弥陀の慈悲の中に溶かされていくのです。

【初めての韓国1】

(1990年8月1日から2日まで)

一度韓国に行ってみたいと急に思い立ち、関釜フェリーで行くことにして、一人で出かけた。韓国の仏教事情に関心があったので、僧服(間衣・輪袈裟)でかけたのである。その頃の私は韓国近代史もならず、韓国仏教の事情も少ししか知らなかった。ただ野次馬根性での旅だった。行きフェリーと帰りの飛行機の切符以外はいっさい決めず、全くのフリーな行程であった。新幹線で下関に行き、下関港から夕刻フェリーに乗り、船底で横になる。船に乗ることは鹿児島県の甞島にいたのでなれていた。乗客の多くは韓国人だった。夜の玄界灘は随分荒れ、船が上下左右に揺れて、かなり睡眠不足のまま、翌朝釜山について。船から出ようとしたら、昨晩隣り同士で話をしあった韓国人が「この箱を一つもって出て欲しい」といわれた。中身は日本の電気炊飯器であった。韓国人が自国にこうした製品を持ち込む数量が制限されているので、私に持たされたのである。下関―釜山の航路は戦前から日本と韓国を行き交う多くの人たちが利用し、多くの喜びや悲しみや嘆きを刻んできた。その写真が釜山港の一室に展示されていた。強制的に朝鮮半島の人たちが日本に労働者として連れてこられたときの写真とか、敗戦になって大陸や朝鮮半島からの日本人の引き上げ者たちの写真もあった。さて、釜山港近くの地下鉄で、通度寺方面行きの高速バスが出ている駅まで乗った。車中立っていると前に座っていたご婦人が立ちあがって席を譲られたのには少し驚いた。私はまだその頃は老人ではない、ただ僧服を着ていただけである。どうやらそれは僧侶にたいする態度なのであろう。日本では僧衣を着ているからといって、席を譲られることは極めてまれである。恐縮して席に座らせていただいた。釜山郊外の高速度バスターミナルで通度寺行きのバスに乗り込む。高速バスは韓国の主要な交通手段らしく多く

の人で混雑していた。バスの中で発車を待っていたら、作務衣姿の尼僧さんが車内に入り、何かをみんなに話している。韓国語は皆目わからなかったが、どうやら寺の修復か何かで寄付を呼びかけておられるようであった。話が終わると、車内の多くの人がながしのお布施をした。こうしてバスは出発したが、すごいスピードで怖かった。車外の自然の景観は日本とほとんど変わらない。通度寺の前で下車すると、多くの参拝者がいて、寺の門前で拝観料を払って入っていた。私が払おうとすると、受け取らず、そのままに入れてくれた。私が僧服を着ていて僧侶だということでは拝観料はいらぬということであった。通度寺は韓国三大寺院の一つで、風光明媚な場所にある。新羅の慈蔵が7世紀に創建。その後、秀吉の文禄の役で消失したが再建された。当時のものは五層石塔や舍利塔ぐらいしかない。この寺は曹溪宗で仏教の学場を有し、多くの若い修行者が学仏道に勤めている。周りは山林で境内は広く、寺院の中は明るい。禅宗の寺であるが、諸尊をまつている。中に韓国の民族的な神様もまつている。あるお堂で多くの参拝者が法師の説教を聴いていた。そうこうしていると若い韓国僧から声をかけられた。たどたどしい日本語で、「どうぞ食事をしてください」と云われた。韓国の大きな寺院ではお昼は食堂でだれでもいただくことができるようであった。さそわれたが、釜山で食べてきたのでその由を伝えると、「私たちの部屋でお茶をさしあげたい」と云われ、じゃあということで行った。韓国ドラマに出てくるような部屋に通され、床にじかに座る。座布団などはない。やがてお茶を出してくださった。若い僧侶が十人ほど私のまわりに集まってきて、私にいろいろ話しかけるが韓国語はもちろん英語も苦手なので会話はとぎれとぎれで弾まなかった。日本人僧は彼らにとっては何物珍しかったのであろう、彼らの多くはまだ仏教を学び始めたばかりの僧たちであった。(続)